

病院だより

風疹について

町立和寒病院 院長 山下 晃史

年の春頃、沖縄から始まった風疹の患者数の増加は、夏には東京を中心とした首都圏に広がりを見せました。時々ニュースになっていたので、妊婦さんや妊娠を予定している女性を抱えたご家族の皆さんは、気になっている方もおられることでしょう。今回は、来年には北海道でも患者増加が危惧される風疹について正しく理解していただければと思います。

風疹はウイルス感染症で、風疹ウイルスによって引き起こされます。風疹ウイルスの感染力は、水疱瘡やはしかよりはやや弱いとされていますが、インフルエンザより強い感染力です。風疹ウイルスは感染者の咽頭から排出される体液に含まれ、飛沫感染、接触感染します。伝染期間は発疹の発症前1週間から発疹出現後4日間くらいと言われています。感染してから症状が出るまで、2週間から3週間と比較的長く、発疹などの症状が出る前から感染力を持っているため、風疹患者が増えてくると、免疫の無い人の予防はなかなか困難です

初発症状は微熱、頭痛、倦怠感、鼻水、咳などのかぜ症状が多く、1～5日後に点状の発疹は全身に広がり、3～5日で消えます。20%くらいは発疹が出ないことがあります。小児は38℃以上の発熱が3日ほど、成人は5日ほど出ることが多いのですが、高熱がでない場合も50%程度あります。成人では特に頸部のリンパ節の腫れがよく見られ、小児より症状が重くなることが多いようです。このように症状にばらつきがあり、症状からの診断は不正確で、確定診断には血液検査が必要です。

合併症として、関節炎、血小板減少性紫斑病、脳炎などがありますが、5000人に1人程度で、重篤な状態になることは稀です。もっとも厄介なのは、妊婦の妊娠初期の感染で、胎児に先天性風疹症候群を引き起こすことです。妊娠10週までに妊婦が風疹ウイルスに初めて感染すると、90%の胎児に様々な影響を及ぼすと言われています。先天性風疹症候群の三大症状は心奇形、難聴、白内障ですが、それ以外にも胎内死亡や流産も増えますし、網膜症などの眼異常や髄膜脳炎、脳性麻痺、糖尿病、低体重など多岐に及びます。

インフルエンザのように風疹ウイルスに効果のある薬はまだ開発されていません。そこで大切になってくるのはワクチン接種による予防です。日本では1977年に女子中学生を対象にワクチンの集団接種が開始されました。1988年から1993年までは麻疹の定期予防接種のワクチンとして、麻疹、風疹、おたふくかぜ混合ワクチン(MMR)の選択が可能となりました。しかしながら、この混合ワクチンの健康被害が多発して、接種が控えられるようになりました。1994年からは、12か月から90か月の男女と中学生の男女に風疹ワクチンの2回接種が開始されました。2006年からは麻疹風疹混合ワクチンとして、1歳、就学前年の2回予防接種が開始されました。

1. 予防接種を1回もしていない可能性が高い世代

昭和37年(1962年)4月1日以前に生まれた女性

昭和54年(1979年)4月1日以前に生まれた男性

2. 予報接種を1回受けている可能性が高い世代

昭和37年4月2日から平成2年4月1日までに生まれた女性

昭和54年4月2日から平成2年4月1日までに生まれた男性

3. 予防接種を2回受けている可能性が高い世代

平成2年(1990年)4月2日以降に生まれた男女



制度切り替えの時期やワクチンの健康被害で接種を控えていた時期もあり、必ずしも受けているとは限りません。また2回接種ではかなりの確率で予防効果が期待できますが、1回では効果が出ない場合もあります。ワクチンの予防効果が残っているか、あるいは以前に風疹感染して免疫があるかの判定には風疹の抗体検査(血液検査)が必要です。この検査には5000円程度の費用がかかりますが、妊娠を希望する女性とその同居家族は無料です。来年からは今年感染者の多かった30～50代の男性も無料になるようです。抗体検査で免疫が無いか低下していればワクチン接種となります。ワクチン接種は妊娠中できませんので、早めの準備が必要です。風疹はインフルエンザとは違いワクチンで、かなりの確率で予防できます。気になる方は抗体検査をお勧めします。